

北海道研修 多様性維持の意義 ～アンモナイトと高山植生から考える～

1. アンモナイト 過去から学ぶ多様性の価値

かつて海で繁栄したアンモナイトは、生物多様性と生態系の複雑さを学ぶ上で重要な存在である。北海道で見つかるニッポニテスなどの異常巻きアンモナイトは、一見すると不規則で不利な形に見えるが、それは人間の視点による判断にすぎない。異常な殻の形は、異なる水深や環境に適応し、他の生物と競合しない独自のニッチを確保するための戦略だった可能性がある。またアンモナイトには、小さな卵を大量に産む種も存在し、生殖方法においても多様性が見られる。一方、共通の祖先をもつオウムガイは大きな卵を少数産む戦略をとり、現在まで生存している。アンモナイトの絶滅は進化の失敗ではなく、環境との関係性の中で起こった結果であり、私たちは化石から過去の生態系の複雑さを学ぶことができる。



左：異常巻きアンモナイト
右：オウムガイ

2. チシマザサ 拡大する分布と高山植物の危機

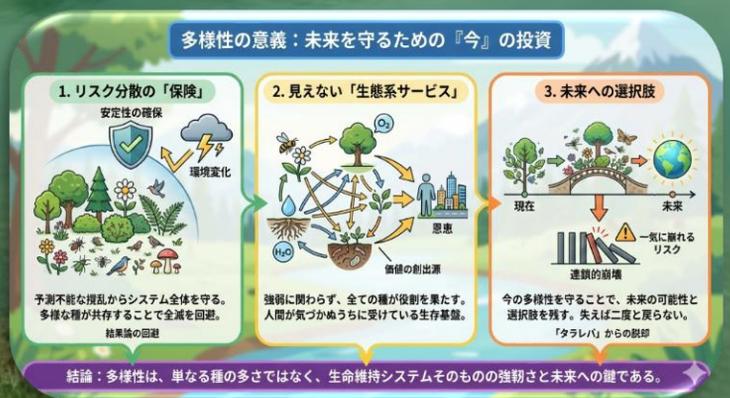
チシマザサは北海道や日本海側に分布する大型の笹である。乾燥に非常に強く、高さという点でも有利なため、近年の環境変化に伴い高山帯へと分布を広げている。その強大な繁殖力は、他の希少な高山植物の居場所を奪い、生存を脅かす大きな要因となっている。

生命全体での生き残りを考えた時に、多様な動植物が一つの種に置き換わってしまうことで、その種が環境変化にともなって絶滅をすると、生命全体の絶滅も否定できない。アンモナイトが絶滅してもオウムガイが生き残ったように、多様性を維持することで未来の生命の維持が可能となる。そのために、人間が生態系の一部として手を加えて多様性を維持することが重要なのである。



多様性維持の意義

多様性は、環境変化に耐えるためのリスクの分散。人類が気づかぬうちに享受している「生態系サービス」の基盤であり、失えば二度と手に入らない未来の選択肢を確保するための生存戦略といえる。多様な種が存在することで、環境変化が起きても一部の種が生き残り、システム全体の崩壊を防げる。直接的なメリットが不明な種でも、失われれば予測不能な連鎖を招くリスクがあるため、**未来の生存基盤を守るべく今の多様性を維持**することが不可欠だ。



提言

持ちつ持たれつを保つことで、より強固な生態系を築いており、その一角を人間が担っていることを自覚すべきである。また、人間が生物に及ぼす影響力の強さも身にしみて感じた。どんな方法であろうと**多様性は保全すべきもの**だと思う。